壊れたもの

岸川　澪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
壊れたもの

【Ｎコード】
Ｎ１５９５Ｚ

【作者名】
岸川　澪

【あらすじ】
「そう、最初から必要なかったのよ・・・
宮野志保の頭脳なんて・・・・」
「わるい人間を罰して何がいけないの？
うふふふっ・・
この女はたくさんの人間を殺したの！生きてない方がいいのよ！」
「愛してるよ・・哀」
「消えちまえっ・・・！」
あの奇妙な出来事から一年・・・

今は二人とも小学二年生
半年前・・つまり出来事の半年後、組織の陣地を見つけ、乗り込んだ。

ただし、幹部のジンの手によりすべてを闇に葬られた・・
それも、すべてのコンピューターを爆破するという残忍な方法で・・
奇跡的に助かった二人
「僕たちは、犯罪者と友達になった覚えなんてありません！」
「そうだよっ！私たち少年探偵団だもん！犯罪者と友達になんか、なれない！」
周りにいたすべての人間が避けるようになった・・
そう、「犯罪者」という肩書きのせいで。
世界規模で放送された事実はむごいものだった

２０年前、天才とはこの人間だと言われていた、宮野厚司
その人物がある恐ろしい組織にいた事が発覚
しかもその娘、宮野志保が研究を受け継ぎ、恐ろしき薬を開発してしまったという事も・・
その宮野志保は今灰原哀という名前で姿かたちを変え、この世でのうのうと暮らしていると報道された
みなが哀から避け始めた
みなが逃げていく・・
でも・・その中で助けてくれたのは・・？

1

「ごめんなさいっ・・・ごめんなさい！」

「もういいよ・・」

「はぁっ・・はぁ・・」

「もう、終わったんだ

すべて・・」

「うっ・・うっ・・うぁぁぁぁあ！」

そう・・すべてが終わったんだよ・・

「これで俺の人生も、組織もおわる・・」

「ジンはどうしてこの組織に・・・？」

「俺は両親の顔も知らない

生まれてすぐ道端に捨てられた

相当の田舎で、吹雪の日だったから、凍え死にかけてたところを、

あの方に拾われた

結構可愛がってもらったよ、それも普通のガキ以上に

その代償としてこの組織で、人殺し（殺人者）として生きろといわ

れた

なんでもしたよ・・あの方のためなら・・
何の記憶も無い俺の頭の隅にあるのは、寒く冷たい雪に包まれた事
その中から伸びてきた手は確かに暖かく、俺を心配そうな目（瞳）
で包んだ
死んでもこの人の言う事を聞かなければいけないと信じた
そして今ここにいる
もしあの方があの時通らなかったら、俺は今ここに存在しないんだ
俺が死んでもあの方は守る」

「じ・・ん・・」

「だがそれも終わりだ・・
あの方がお望みになったこの組織ももう修復不可
もう、終わりだ」

「それはっ・・」
「シェリー、お前に関するデータが大量に入ったメールが、送られ
るんだよ
警視庁にこのボタンを押すとな」

「あなたがそれを押したところで私が逮捕されるだけ
その前にあなたは確実に死ぬわ」
「しかも高性能付き那門でこのボタンを押すとこの組織の建物にあ
るすべてのコンピューターのデータが吹っ飛ぶんだ
空気中に」
「そんな事をしたら一体どうなることかっ・・
このボタンをおし、あのデータが吹っ飛んだら・・すべてが闇に葬
られてしまうわ・・」

「そうだ・・
あの方の遺言でいくと、もし自分の死後、組織が安全に保たれないのであれば、すべてのデータを消し、自分のすべての希望を捨てて欲しいという事だ」

「だめよっ・・ジン！」

「あばよ、シェリー」

「でも・・もう何も・・何も戻せない・・・」

「戻さなくていい・・戦うんだよ・・

2

「学校は、休もう・・」

「・・ええ・・」

ピンポーン

インターホンのベルが鳴り、出てみると、そこにいたのは警部、佐藤刑事、高木刑事だった

「え・・・」

「今日は君たちに話がある

入ってもいいかね？」

「ここは博士の家だからわかんないなぁ」と言いたいところだったのに、入ってこられた

「哀、逃げろっ・・」

「え・・・」

「動かないでもらえるかな？」

「はい」

「哀っ！」

「いいの」

「今日は・・2ヶ月前警視庁の本部のメールに来たメールの話だ

中には、二ヶ月ほど前に起きた、『黒の組織大爆破事件』の裏世界のある人物についてだった

その中でその人物の名前は、『シェリー』と書かれている。

どうやらその人物の本名は、宮野志保という女性らしい

今は18歳だそうだ。

だがな、その女性の顔写真はそのなかにあったのだが、君にとても似ていたんだよ・・哀君」

「っ・・・」

そういった警部の合図で、高木刑事がクリックをして見せてくれた・・

その女性の顔立ちは、哀と瓜二つ

簡単に言えばこの画像は彼女の将来とでも言えるのだろうか

美人な顔立ちだが、タートルの上に白衣すがた

何かの証明写真のようなものだった

「そしてこの文章の中にはかかれていた

２０年前天才と言われていた科学者、博士号も手に入れている宮野厚司の娘、宮野志保は、ここ数ヶ月の間に、彼女自身が開発したＡＰＴＸ４８６９という薬品を飲み、体が幼児化して、組織から脱出

誰かに匿われ、どうやら灰原哀という名前で小学一年生をすごしていると・・

このことに関して、これ以上のことは書かれていなかったが、君の事で間違いないだろう

灰原なんて苗字、君以外いないからな・・」

「っ・・・・

そう・・です・・」

「哀、だめだっ・・・・」

「宮野志保は私です

宮野厚司は私の父です

ＡＰＴＸを飲んで幼児化して、ここに匿ってもらってます！」

「だとしたら、君は逮捕される事になるんだ」

「わかってます！！」

「哀っ！

ちがう・・哀は殺されると脅されてやっただけだ・・」

「ただし、このことをあの事件に関与していたＦＢＩに伝えると、彼女の事は逮捕も起訴もさせないといっていた

ＦＢＩがそういっているため、われわれは君に手を出さない

灰原哀さんにはな

宮野志保さんは、どうなるかわからない・・

コナン君のことも調べさせてもらった

説明は面倒なんで、やめとくが」

「はい・・・・」

「ただし、問題は・・」

「・・・？」

「組織の誰かが警視庁にメールを送ったのと同時に、マスコミにも売られていたようで・・」

「そんな・・・」

翌朝

「２０年前天才と言われた宮野厚司の娘、宮野志保が２ヶ月前に起きた爆破事件の組織に関与していた事が発覚しました

彼女は数ヶ月ずっと行方をくらましているそうです

という事で、宮野志保さんは、昨夜、国際指名手配されました

宮野志保さんの顔写真がこちらです」

「嘘ッ・・・・」

「警部・・どうしてこんな事に・・」

顔写真なんかを報道されたら、ばれてしまう

宮野志保＝灰原哀と

3

あの日警察関係者が来てからもう3日

そろそろ学校に行かなければ、風邪ではすまなくなる

まぁ、宮野志保の顔写真が未成年だという事にも関わらずばんばん放送されてしまったため、きっと近所中でうわさが広まっている頃だろうと二人は思っていた

二人はもう引きこもり状態

外の空気がどんなものに待っているかなんてわからない

もしかしたら人とすれ違うたび哀のうわさをしているのかもしれない

あの少女は哀なんだろうと

だとしたらどういうことになるか

買い物をしているところを話しかけていた少女は哀だったのか？という事になる

あの指名手配の報道の後に、ＡＰＴＸのことまで報道されたうえ、哀が幼児化したということまで報道されてしまった

哀の顔写真つきで

本当なら警察がとめる事だが、それを操っているのはアメリカの報道局からのもの

とても手を止めることなど出来なかった

もう、日本中が壊れていたのだ

アメリカに操られ、それをとめる事も出来ない日本警察

「今日こそは、学校にいかなきゃ」

「そんなことしたらいじめられるに決まってんだろ！」

「仕方ないことじゃない！

私、行く

行くから」

「おいっ・・」

もう登校時間は終わっていた

もう道には小学生の姿も無く、物静かになっていた

ある店はＯＰＥＮの札をめくろうとしているところだ

哀は勉強道具をそろえ、家を飛び出す

それにあわせてコナンも家を飛び出す

哀が一人で学校に行ったらどうなるだろうか

みんなにいじめられ、教師たちもそれをとめようとしなくなるだろう

今は子供が怖いんじゃない

一体どれだけの大人たちに言われるだろうか

「ここは犯罪者の来るところではない」

「義務教育の終わった子供は帰れ」

と

言われるだろう

いまやトップニュースの哀の話を知らない人間などいないのだから

哀は学校の校門の前で立ち止まった

入れないのだ

インターホンを押してみると、教師はしばらく黙っていた

いや、奥で何かを話している

「どうしますか」とか、「あのコだろ？」とか、そういう声が流れている

教師はしぶしぶ「入れ」と言ったのだ

どうせからかってすぐにでも学校から追い出すつもりだったのだろう

教室に入ると、空気は冷たかった

チョークを持って黒板に向かう小林先生はその状態で固まり、クラスのみんなはドアの方を向いている

明らかに、「なんなの？」という視線だ

「「遅れてすみません」」

二人が出せた言葉はそれだけだった

二人はゆっくりと教室に入り、席に近づいた

そのとき口を開いたのは、歩美だった

「何で来たの？

二人とも、小学生は終わったはずなのに」

空気が硬直した

今もっとも言っちゃいけない言葉だ

次に開いたのは元太だった

「ここは犯罪者の来るところじゃないぞ！」

もっとも哀の心に刺さる言葉だった

「っ・・・・・・」

「ほらほら、みんな

授業に集中！」

小林先生は優しかった

今言った言葉に反対も賛成も言わず、ただ助けてくれたのだから

でも、すべての悪魔はこれからだった・・・

4

その日、普通に過ごしていた

突然学校に現れてからみんなの注目の中、普通に授業を受けた

別に五分休みは、二人ともただ本を読んでいるだけで、何をするわけでもなかった

小林先生も話しかけづらいのと、話しかけたら注目されてしまう、それを恐れ何も出来なかった

そして2時間目と3時間目の間にある中休み

そのときだった

「ねぇ灰原さん」

クラスの女子4人だった

いつもクラスの中では固まっていっしょにいる女子グループだった

「何かしら?」

「ちょっとさ、いいかな?」

一番前に立つ女の子の名前は堀愛莉沙(ほりありさ)さん

いつもリーダーシップをとっていて、多分このグループのリーダー

「ええ」

このやり取りが教室の中にいる人間に聞こえないわけが無い

そう、わかっている

彼女（哀）を、いじめるのだと

でも、それをするのだろうととめたら、自分たちがされるかもしれない

それに、それは彼女（哀）を犯罪者なのだと言うのと同じ事になってしまう

それをさけ、誰も止めなかった

きたのは、グラウンドの、カラーコーンやハードル、こいのぼりなど、倉庫になっているところの裏だった

「灰原さん、ここまで来て、あなたをここに連れてきたんだから、何をしたいのかぐらい、わかるよね？

灰原・・宮野志保さん」

「っ・・・・・

ええ、わかるわよ

私に何か、する気なんでしょ？」

「そうだよ

さっすが大人の宮野志保さんにはわかっちゃうんだね」

「・・・・・・」

ずっとしゃべり続けているのはあの堀愛莉沙という子

「ねぇみんな、こいつ、やっちゃおうっ」

「そうだね、こんな人、生きててもなぁーんの意味も無いもんね」

次にしゃべったのは柴田麻結（しばたまい）という子

この子はいつもおとなしい子だが、何回か悪口を言った事で問題になっていた

「じゃあ、いくよっ！！」

いつものリーダーシップで大きな声をあげ、みんなが哀に襲い掛かってきた

だからといって別に逃げるわけでもない

大声で助けを求めるわけでもない

ただたっているだけだった

みんなが哀にすることは、「いじめ」という言葉で片付けられるものじゃなかった

殴り、蹴り、散々の暴行を加えた

「んぐぅっ！！」

さっきの子が蹴り飛ばした

「なんで？

何で泣かないのよっ！！

泣きなさいよっ！！！！」

そう叫んで殴り続ける

「じゃ、あ、泣いたら、やめる、の？」

「は？

辛いからそんな事言うの？

じゃあ答えてあげる

やめないよ

泣いたら泣くぶんいじめる

でもさ、泣いてくれないと、「いじめてます」っていう気がしないんだよね

泣いてくれないと、苦しんでる気がしないの」

「そ、う

じゃあ、その疑問こたえ、るわ

な、かないのは、なけ、ないから」

「はぁ？

答えになってないんですけどぉー？」

「なける、ようなことじゃない、から

べつ、につらく、ないから」

「どういう意味ぃ？

こんなに散々ひどい事されてつらくないわけないじゃん

現にふつーにしゃべれてないよ」

「私、は、みんなより、年が上、よ

自分が、一体どれだけのことを、してきた、か、自分が、誰よりも、わかってるつもり、よ

だから、こんなことを、される、のは当たり前、だと、思うわ

なんの、不思議も、無いし、される、いわれが、ない、ともおもわ、ない

されても、しか、たないとおもって、る」

「なによ・・

ただの・・ただの犯罪者のくせにっ！！！！」

そういって哀の襟をつかみ、思いっきり横に投げた

床に頭を打って、気絶した

「ふんっ・・

行こう

チャイムなっちゃう」

「でもっ・・あとでもしうちらがやったって言ったら・・」

「かまう事じゃないよ

だって、こんな女に味方する先生なんて、そうそういないから

どうせうちらなんて怒られないって」

「そうだね」

四人は教室に戻った

教室の人が四人を見て、哀をどこかにおいてきた事はわかる

でも、それを聞く勇気も無ければ、哀を探しに行きたいともう心も

誰の中にも無かった

でもコナンは、自分のいなかった間、きっと四人が哀を連れ出し、

何かをしたのだろう、そう推理した

「おい歩美！哀、どうしたんだ？」

「あんな人の事、知らないよ

コナン君こそ、あんな人の事探さない方がいいよ

だって、コナン君は、あの人といたせいで、人生、壊しちゃったんでしょ？

いないほうがいいって」

そういえば、それもニュースで報道されたんだっけ・・そう思った

「いいじゃねぇか！！

教えろよ！！

歩美言ってたよな？！

自分が強盗に襲われたとき、最後に消火器で犯人に対抗してくれたから自分は助かった、みんな助かったんだって

その恩はどこにいったんだよ！！！」

「だって、犯罪者なんだよ？

そんなの関係ないよ

コナン君も早く目を覚まさないと、きっといい事なくなっちゃうよ」

「あんだよ・・」

二回目のチャイムとともに、教室に戻ってきた小林先生に言った

「哀が、いなくなったんだ

探しにいってくる！！！！」

「あ・・ちょ、コナン君？！」

教室から走り出したコナンには、もう何も考えていることが無かった

5

学校中を駆け巡り、もう２０分たった

コレだけ探しても見つからないということは多分外にいるのだろう

そう思って外を探し始めた

こんな太陽の照りつける日だから、早く探さないと熱中症になっちまう・・

結局いっしょに探してくれるのは小林先生だけ

他の人は、児童であろうと、教師であろうと、探すどころか普通の顔で授業を行っている

まさかここじゃ・・そう思って倉庫の裏を見た・・

そこには・・

哀がぐったりとして倒れていた

「小林先生！！！！」

「いたの?!」

「倒れてるよ・・ここに・・

早く保健室に運ぼう!!」

「そうね・・」

保健室に運んで、先生に診てもらうと、体中、顔にはあざがあり、多分頭を打ったことで気絶したのだろうと言っていた

だが別にどれも命に別状の無いもので、すぐに治るだろうという事だった

ただし、問題なのは精神的なことだ

たとえ身体的には大丈夫でも、そんな風に責められ、暴力を受けたという事は、多分今までよりも責任を感じてしまうだろう

だとしたら、なにをしでかすかわからない

いまや世界問題になっているこの件で、助けようとしてくれる人なんてそうそういない

日本から離れればいいという問題でもない

今は、お金の無い野外動物のような生活をしている国でさえ、この状況を、このことを知っているのだから

「哀・・？」

「こ、こは？」

「保健室だ・・

気を失ってたんだ・・

何があったんだ？」

「女子に、暴行された・・ってところかしら？」

「おい・・

大丈夫、かよ」

「・・この通り？」

「ひとまず、博士呼んでるから家に帰るぞ

明日、転校の手続きをしてもらう」

「ちょっと・・」

「こんな生活で生きていけるわけ無いだろ！

子供だけだったらいいが、世間を見てみろ！
いつ大人が襲ってくるかもわからないんだ！！
これ以上、こんな社会で生きていけるかよ・・
逃げるぞ」
「え？」
「証人保護プログラムを受けるんだ
そして、アメリカで暮らそう」
「たとえ名前を変えても、姿かたちでばれてしまうわ
そうなったら、被害は私たちだけにとどまらないわ
私たちを匿ってくれた人たち、その人たちにだって危害が及ぶ！」
「だとしても、コレじゃあ命だって明日あるかわからないんだ！」
「っ・・・・」

6

俺たちは、車の中で一言もしゃべらなかった

博士はよほどショックだったのか、ロボットのように運転して、上の空だ

哀は、悲しそうな表情で外を眺めている

「着いたぞ」

博士の声は、確かに博士自身のものだが、博士の心は入っていなかった

哀はいそいそとおり、家に入った

「私、やることがあるからしばらく地下室にいるわ

転校でも退学でも、やりたいことやってちょうだい」

そういってそのまま地下室に下りていった

「博士・・

江戸川コナンと、灰原哀を、帝丹小学校から転校させてくれ

明日でもあさってでもいい

とにかく、もう二度と俺たちはあの学校には行かない」

「わかった」

「それから、これからずっと、俺たちは引きこもる生活を続ける事になると思う」

「わかっておる」

6（後書き）

短っ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1595z/

壊れたもの

2011年12月20日19時51分発行